

『ガンより怖い薬剤耐性菌』 三瀬勝利・山内一也 著

発行：榊集英社/〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋 2-5-10/☎03-3230-6391/  
B6判/238頁/定価：本体840円+税/2018年6月20日発刊/ISBN978-4-08-721036-1

本書の筆頭著者の三瀬勝利先生は我々の学会の名誉会員で、微生物関係全般ならびに関連分野に造詣が深い方であり、多くの著書を執筆されています。また、もう1名の著者である山内一也先生はウイルス学全般に造詣が深い著名な学者であります。

本書は、その題目にもあるように、薬剤耐性菌の怖さを取り上げた書籍であります。薬剤耐性菌は近年非常に問題となっており、かつ早急に解決しなければならない最重要課題であります。

冒頭の中で、「人類は今、ふたつの医学上の危機に直面している。ひとつはペニシリンなどの抗菌薬が効かない薬剤耐性菌が蔓延し、死亡者数が増加していること。これによる世界の感染死者数は将来、ガン死者数を上回るとも推定されている。もうひとつの危機は感染症のみならず、アレルギー、ガン、肥満、ぜんそく、自閉症、生活習慣病、潰瘍性大腸炎などの患者数が増えていることだ。これらの危機は治療等で抗菌薬を乱用し、人が生きていく上で欠かせない腸内や皮膚の細菌・微生物を殺してきたのが原因である。抗菌薬まみれの人類は危機を回避できるか？ 細菌とウイルスに対する正しい知識を紹介し、最新感染症対策も解説。」と述べられています。

本書では、腸内フローラ、すなわち共生微生物の役割の重要性(大切さ)が強調されています。これに対して抗菌薬の乱用は悪影響を及ぼすことが歴然であることが述べられています。むやみやたらに抗菌薬を使用することは、耐性菌の出現を助長し、いざと言う時(本当に抗菌薬の使用が必要な時)、耐性菌の出現により、抗菌薬が有効な手段とならないのは不幸なことと述べられています。

医療現場での抗菌薬の乱用によって、世界中で薬剤耐性菌が蔓延していること、また、薬剤耐性菌による感染死者数は将来、ガンによる死者を上回る可能性があること、さらに耐性菌蔓延で人類はどうなるのか、そして感染した際の対処法について解説されています。

近年、抗生物質が効果を示さないメチシリン耐性黄色ブドウ球菌(MRSA)およびバンコマイシン耐性腸球菌(VRE)による感染症が増えて来ていること、また、多剤耐性の緑膿菌(MDRP)やセラチア菌感染症も増えて来ていることが述べられています。これらは日和見感染症として、医療分野等で非常に問題となる細菌類であります。

本書では重要な内容が非常に盛りだくさんであります。書面の関係で全ては紹介出来ませんが、私が特に印象に残った記述を若干ご紹介します。

喘息や花粉症などのアレルギー疾患が、抗菌薬などの使用が関係していることを、EBM (Evidence Based Medicine) をもとに解説されています。

自閉症と腸内の共生微生物との微妙な関係として、腸内の構成微生物の多様性が失われると、肥満、炎症性腸疾患、喘息、花粉アレルギーなどの病気が引き起こされることを述べられています。また、自閉症の患者（特に小児）が増加しているが、その発症にも腸内の共生微生物の多様性が失われていることが関係しているのではないかと述べられています。

抗菌薬と消毒薬の選択毒性の違いについても述べられています。

抗菌グッズの使用の是非についても触れられています。

日本もコレラが常在する国になるかも知れないと警告をならされている。

結核の撲滅が遅れている日本と題して、我が国では結核の新規患者や死亡者が少なくなっているが、近年、その減少率が少なくなり、また、都市部では社会的弱者間を感染源とする結核患者の拡大が憂慮されることを述べられています。

抗菌薬がヒト以上に大量に家畜に対して使われていることも強調されています。

近年、医療分野で問題となっている非常にやっかいなディフィシレ菌 (*Clostridium difficile*) のことも取り上げています。

クロラムフェニコールのことも触れられています。かつて耐性化に見舞われ、使用が厳しい状況に陥ったが、使用制限により、近年復活して来ていることが述べられています。やはり、抗生物質の使用は「匙加減」が非常に重要なこととございます。

なお、巻末に用語解説が丁寧にされているので、専門用語の理解に役立ちます。

著者は、エピローグの項目で、微生物との対決よりも共存を考えようと述べられています。また、本書の中に登場する有名な学者であるレダーバークの先見の明が高く評価され、「我々は抗菌薬の乱用を避け、共生微生物を我々の一部として大切にしなければならないことは、どのように強調しても強調し過ぎることにはなりません」と述べられています。まさにその通りであります。

「おわりに」の項で、著者の三瀬先生が、耐性菌の怖さを身を持って体験されたことが書かれています。非常に説得力のある見解であると思います。

本書は、微生物、特に我々と共存する共生微生物の大切さを啓発する非常に重要な著書であり、医療関係者だけでなく、広く微生物全般の研究に従事するすべての研究者および業界関係者ならびに一般の方々にお勧めする書籍でございます。

(日本防菌防黴学会会長:元 近畿大学農学部 坂上 吉一)